

とある龍京の 日常 非日常



芳田尚哉



燦々と陽光が降り注ぎ、がやがやと賑やかな中、頭にバンダナを巻いた男——バン・ギウが、人混みをかき分けて歩いていた。

人が集い、繁華街を形成しているここ龍京は、さらなる人を呼び寄せている。

それは、昼も夜も変わらず、独特の雰囲気醸し出している。

「ったく……ここはいつも人ばっかだな。っと、わりい」

ぶつからずに歩く事ができないこの街だが、決してこの賑やかさが嫌いというわけではない。

むしろ、この賑やかさが心地いい。

人が集うという事は、情報も集うという事だ。故に、なにかを調べるにはもってこいの場所でもある。

バンは、何度もぶつかりながらも、目的の場所を目指して歩いていく。

「にしても、あいつはなんで、呼び出すのが唐突なんだよ」

もうちょっと、人の都合も考えろってんだ……と、呼び出してきたカズノ・ナスのすかした顔を思い浮かべながら、ぐちぐちとぼやく。

「まあ、しばらく会ってなかったからな……。久しぶりだが、どうしてあいつなんだ？ せめて、会うならカティアが……」

にやにやしなながら歩いているバンを、周囲の人たちは気味悪そうに見ながら、避けるように歩いているのだが、当の本人はそれに気付いていない。すこし、歩きやすくなったと思う程度だ。

まさか、周囲が自分を避けているとは、微塵も思っていない。

「あいつが言ってた時間までは、まだあるしな……。龍京は久しぶりだし、どっか散策でもしてみるか」

待ち合わせは夜なので、まだまだ時間はある。

「にしても、こんなに早く着くってのは、オレってば律儀だよな……。まあ、たまたま近くにいたっただけだがな」

はははと、周囲の目を気にする事なく笑う。

「お前は周囲を気にせず、なにを笑っているのだ」

バンの背後から、端正な顔つきをした気品のある男が声を掛ける。

「ん？」

どこか聞き覚えのある声に、バンは振り向いて、すぐに顔をしかめる。

「……マジかよ」

そこにいたのは、エリアス王室の騎士団長であるレビ・アレンスだった。

バンは、感情を表に出さず、どこか飄々としているレビに、どこか苦手意識があった。

「もう少し、周囲を気にしてはどうだ。先ほどから、お前を見る周囲の目が痛々しいぞ」

私には関係のない事だがな、と付け加えて、去っていこうとする。

「そいつは悪かったな。それにしても、どうしてお前がこんなところにいるんだ？」

レビはピタッと静止して、キビキビとした動作で振り返る。

勢いで言ってしまうってから、バンはしまったという顔になる。

去っていこうとしていたのを、どうして引き留めてしまったのか。

(オレはなに考えてんだよ。このまま、おさらばすりゃよかったのによ。ったく.....どうかしてやがる)

思わず、ちっと舌打ちをしてしまう。

それをレビに気付かれたか.....と思ったが、レビは気にも留めていないようだ。

(まあ、こういうヤツだよな)

少しだけホッとする。

「お前に言う必要があるのか？」

レビは淡々と答える。

「あるかないかつたら、まあ、ないだろうな」

「ならば、答える必要はあるまい」

その返答に、バンはカッとなってしまう。

「おいおい、そりゃないだろうよ。知らない仲ってわけじゃないだろうよ。ちょっとくらい、久しぶりに会った仲間と話したってよかないか？」

「それはお前の理屈だろう。私には関係ない事だ」

「お前は.....ちっとも変わってないのな」

「当然だ。私は私だ。他の何者でもない」

レビは相変わらずの無表情で答える。

「私はお前と違い、暇ではないのだ」

そう言って踵を返すと、雑踏の中に姿を消した。同じ過ちは繰り返すまいと、そのままやり過ぎず。

「.....なんだってんだ？ つうか、オレもどうかしてるよな。あいつと話そうなんて、今日はおかしいのかもしれないな」

レビが消えていった方を見ながら、バンはぶつぶつとぼやいていた。その姿を、周囲の人たちは気味悪そうに眺めていた。

バンは、レビと会った事を記憶からすっかり消して、再び雑踏の中を歩いていた。
大通りから脇道へ入ると、そこは同じ街のはずなのに、全く別の街かと思われる雰囲気になる。

賑やかさから遠ざかり、少し閑散としている。ほのかに薄暗く、空気も湿って重たく感じるほどだ。

そのせいもあるのか、人通りはほとんどない。今も、見渡す限りは、バンしかいない。
そんな脇道を、バンは臆する事なく歩いていく。

「久しぶりだが、変わってないのがいいよな」

どこかこの空気を楽しんでいる節がある。

特に珍しいものがあるわけでもないのだが、つい周囲の建物を見てしまう。

そんな通りを抜けると、少しだけ賑やかさが戻ってくる。

ほんのわずかでも、この薄暗さに慣れてしまったのか、通りを抜ける際の明るさに、思わず目をすがめる。

すぐに目も慣れ、周囲の景色が飛び込んでくる。

「やっぱ、こういうのはいいよな」

そこには、大通りとは少し違う雰囲気、多くの屋台が並んでいる。

「おお、バンじゃないか」

近くの屋台から、髭面の店主が顔を覗かせる。

「久しぶり」

バンはその屋台に向かって歩く。

店先からは、香ばしい匂いと一緒に、煙がもくもくと上がっている。

「どうしたんだ。また、なにかやらかす気じゃないだろうな」

店主が、店先の網で串に刺した肉を焼きながら声を掛ける。

「おいおい、なにもしねえって。ちょっと、立ち寄っただけだよ」

いきなりの挨拶に、バンは苦笑いを浮かべる。

「本当か？ お前の事だから、絶対になにか企んでやがるだろ。ここだけの話にしといてやるからよ、話してみろよ」

「だから、なにもやらねえって」

「……お前、本当にバン・ギウか？ 似てる別のヤツじゃないだろうな」

「本物だよ。……ってかな、オレがなんにもしないと疑われるって、そりゃないだろうよ」

そう言うと、店主は高らかに笑う。

「はっはっはっ。悪い悪い。ほれ、これでも食え」

そう言って、バンに串焼きを差し出す。

「な、なんだよ」

「久しぶりに会った挨拶だよ。おごりだ、ありがたく食え」

「まあ、もらえるもんはもらっとくか」

バンはそれを受け取り、早速かぶりつく。

じっくりと焼かれた肉がジューシーで、噛めば噛むほど肉汁が溢れてくる。

「やっぱ、旨いな」

一口食べると、もう止まらない。ついつい何本でも食べてしまう。

「本当にお前は旨そうに食うよな」

「おっちゃんの串焼きは、大陸一だって。こんな旨いのは、ジエンディア大陸どこに行っても食えないぜ」

「まったく、世辞ばっか言いやがって。どうだ、もう一本食うか？」

気分をよくした店主が、もう一本バンに差し出す。

「おっ、マジで。もらうぜ」

まだ食べている途中の串を持ちながら、もう一本を受け取ると、さっそくそれにかぶりつく。

「やっぱ、旨いね」

店主は、そんなバンをしばらく見ていたが、やがて思い出したように口を開く。

「バンよ、お前なにも企んでないなら、どうしてここに来たんだ？」

口いっぱい頬張っていたので、慌てて咀嚼して飲み込む。

「ん、あっ。ちょっと、昔の知り合いに呼ばれたただけだって。で、約束の時間まで、まだ余裕があったからな。それで、ここに来てみただけだよ」

「.....お前らしくない。女か？」

店主は小指を立てて訊く。

「だといいいんだけどな。残念ながら違うんだ」

「お前、そっちの趣味があったのか」

「気持ち悪い事言うなよ。なわけないだろうが」

「それなら、どうしてだ？ お前が女絡み以外で動くとは思えないんだがな」

「まったく.....オレはそんなんじゃないって。だいたい、オレってどんなヤツなわけ？」

「ちゃらんぽらんで調子がいいヤツだな」

店主は、遠慮する事なく笑いながら言う。

「おいおい、そりゃないだろ.....」

バンは、率直すぎる言葉に膝を突いてしまう。

ひとしきり落ち込んでから、バンは改めて周囲を見回すと、ふと違和感を覚えた。

「なあ、なにかあるのか？」

「唐突になんだ？」

店主が訝しそうに訊き返す。

「いや、ちょっと雰囲気が違うっていうか。そりゃ、前に来た時と違っててもいいんだけどよ、そういうんじゃないしで、なんだか浮き足立ってる感じがするんだけど」

そう言うバンを見て、店主は、ほうっと頷く。

「さすがってとこだな。そういう機敏さはあるようだな」

「なにかあるんだな」

キッとバンの目が変わる。

「まあな。だが、お前さんには関係ない事だよ」

「.....関係ない、か。まあ、オレはただの客だしな。この一帯の住人でもないし、関係ないけど.....だが、気になるんだよな。教えてくれよ」

「本当にたいした事じゃねえよ」

店主は、これで話は終わりと言いたそうに、網の上の串に集中する。

「おっちゃん、本当になんだ？ オレが部外者なら、別にいいんじゃないか？」

「部外者だから、言ってもしょうがないんだよ」

「余計に気になるだろ。オレにできる事があるなら、手伝ってもいいぜ」

にやりと笑うバンをしばらく見て、店主はしょうがないと呟く。

「まあ、お前ならツテもあるかもしれんしな」

「おっ、教えてくれる気になったのか」

バンは、網の上に乗出さんばかりの勢いで言う。

「噂程度なんだがな、エリアスの偉いさんが、今日ここを視察に来るって話なんだ」

「.....はあ？」

バンは疑問符を浮かべる。

「わけわからん。どうして、エリアスがこんなところを視察するんだよ」

「こっちが訊きたいくらいだ。そのせいで、みんな緊張してるんだ」

「エリアスが.....ね。どういう目的なんだ？」

「さっぱりわからん。まあ、こっちは商売の邪魔さえしてくれなければいいんだが.....」

「まさか、ここを潰そうなんて.....」

バンは声を潜める。

「それはないだろう。エリアスが、この龍京の事に関与するはずがない」

店主は否定するように言うが、どこかその可能性を拭えずにいた。

「だよなあ。だったら、余計にわからねえな」

「そうだろう？」

二人は腕を組んで考え込む。

「そういや、お前はエリアスの知り合いはいないのか？」

「エリアスカ.....まあ、行った事はあるし、こうして、誰かと親しく話す事はあるけどな.....。さすがに、城の関係者はな.....」

「そうか。さすがのお前でも、いなかったか.....」

店主は残念そうに肩を落とす。

「すまねえな。アオイチなら、しばらくいたし、黒月姫も知っちゃいるけど、エリアスはな.....」

「いやいや、気にするな。どのみち、お前には関係のない話だ」

「事前に聞いてりゃ、調査してきてやったんだけどな.....」

「いって事よ。まあ、どうなるかわからんが、なるようにしかならねえもんだしな」

はははと笑いながら、なんでもないように装う。しかし、バンには無理をしているようにしか

見えなかった。

「ちょっくら、この辺を調べてみるか。時間がねえから、期待するなよ」

そう言うと、バンは真剣な顔つきになって、屋台街を進んでいく。

「お、おい……」

面倒を掛けまいと、止めようとする店主の声は届かなかった。

周囲を警戒しながら、屋台で賑わう人混みをかき分けるように歩いていく。

店はもとより、歩いている客たちに注意しながら歩いていく。

(エリアスの偉いさんとか言ってたからな.....)

王室の関係者ならば、おそらくは警護を連れての大所帯だろう。そういう一行があるいていれば、この雰囲気には不釣り合いだし、そもそも集団で歩いていけば目立つはずだ。

なにかしらの騒ぎになっているものだ。

しかし、そういうものは見受けられない。

それぞれの店主が、少し緊張しているように感じるだけ、屋台を訪れる客は、普段と変わらないように見える。

(まさか、一般客に変装して.....って、それでも、護衛ぐらいはいるだろ)

そう考えて、複数人で歩いている連中を探す。

「あちこちにいやがる」

一人で歩いている者も多いのだが、半分ほどは連れがいる。

「こりゃ、難しいか.....。だが、怪しそうなヤツはいないけどな」

不審な集団は、やはり見受けられない。

「情報収集たって、ここの誰も詳しくは知らないんだよな。かといって、龍京の誰が詳しいかって.....思い浮かばねえ」

そもそも、龍京の事にエリアスが絡んでいるだけで面倒だ。それに加えて、今回は時間がない。

「とにかく、街に出てみるか」

この屋台街で情報を得るのは不可能と判断して、街で情報を仕入れる事にした。

狭い路地に入り、表通りに出ようとしたところで、バンはまたしても、レビと遭遇した。

「おお、レビじゃねえか」

「またお前か。私は任務があるのでな。お前の相手をする暇などない」

レビは、バンを相手にするつもりはないようで、そのまますれ違って行こうとする。

(待てよ。あいつって、エリアス王室の騎士団長だったよな)

エリアスに知り合いはいないと思っていたが、レビがいた。

(どうして思い出せなかったんだろうな.....。やっぱ、苦手ってのがあったんだろうな)

「レビ、ちょっと訊きたい事がある」

バンは、すれ違っていくレビを呼び止める。

呼び止められたレビは、ずっとバンを睨むように見る。

「私はお前と違って暇ではないと言ったはずだ」

「オレだって、別に暇じゃねえんだよ。お前、エリアスが龍京の視察をするって話、知らねえか？」

それを聞いて、レビは無視して歩き出す。

「おい、知ってるかどうかくらい言えってんだ」

「……………」

しかし、レビはバンを無視するように歩く。

「おいっ」

と、駆け寄って、肩を掴もうとして、

(やべえ)

と、すんでのところで止める。このまま触れていれば、間違いなく投げ飛ばされていただろう。

「レビ、お前……なにか知ってるな」

カマをかけようとするが、レビはそれすらも無視する。

「レビ、無言や無視ってのは、肯定と一緒になんだぞ」

「好きに解釈すればいい」

(ようやく答えたかと思ったらそれかよ)

バンは心の中で毒づきながら、レビを追う。

レビは、そのまま路地を抜け、屋台街へ出ていった。

「あいつ……まさかな」

レビがこういう場所を訪れるのは、どう考えても不自然だ。

エアリスの偉いさんと聞いていたので、大臣クラスかと勝手に思っていたが、それすらも怪しい情報だった。

「本当に、あいつなのか……？」

エアリス王室に関係のあるレビが、普通ならば訪れるはずのない屋台街にいる。

確証はないが、レビが視察目的だと推察するには充分だ。

「訊いたところで答えてはくれないだろうな……」

力づくで訊く事はできそうにない。だからといって、素直に教えてくれるはずもない。

バンは頭を抱えながら、どうすればいいのか考えつつ、見失わないように追いかける。

「ったく。どうも、あいつにはペースを狂わされちまうな」

人が多い屋台街に入られると、見つけるのに苦労するかと思われたが、この場には異様としか思えないレビの姿は、完全に浮いており、すぐに見つける事ができた。

それぞれの屋台の店主たちはもとより、客たちも思わぬ珍客を遠巻きに見ている。

そんな視線を受けつつも、レビは全く動じる事なく、ただひたすらにそれぞれの屋台を見ている。

「あいつは……なんなんだよ」

頭をぼりぼりと掻きながらぼやく。

「お前、なにしてんだ」

周囲が自然と道をあけてくれるので、バンは容易に近付く事ができた。しかし、身の危険を考えて、肩を叩く事はしない。

「関係ない事だ」

「ここの視察だろ？」

バンは齒に衣を着せずに言う。

「答える必要はない」

レビも動揺する事なく言い放ち、バンの存在を気にしていないかのように、屋台の様子を隅々まで見ている。

「言葉ではなんて言っても、お前の行動が肯定してるじゃねえか」

「好きなように解釈しろと言った事がなかったか」

「なら、好きにさせてもらおうか。エリアス王室の騎士団長様は、ここ龍京の路地裏の屋台街を、どういうわけだか視察なさっている、と」

バンは、あえて周囲に聞こえるような声で言う。それを聞いて、事情を知らなかった客たちの間で、ざわめきが波のように広がっていく。

そんな空気の中、レビは一切動じない。

(こいつは、どこまでも無感情つつうか、空気が読めてないよな)

バンの方が気疲れして、大きなため息を吐く。

その後も、レビは周囲を気にする事なく、各屋台を見て回った。

嵐のような時間が過ぎ去り、屋台街にいた全員がなにか憑き物が落ちたかのように感じていた。

「おい、バン。あいつはなんだったんだ？」

近くにいた男が訊く。

それを皮切りにして、次々とバンに質問が浴びせられる。それもそのはずで、レビと話していたのは、バンだけなのだ。その様子をただ見ていただけの人たちにとっては、唯一の情報源だ。

「ええい、オレにもよくわからねえんだよ」

バンは質問の声を振り払うように、実際に周囲を振り払ってその場を離れようとする。

しかし、押し寄せる人がそれをさせまいとする。それでも、バンはすり抜けるように、脱出に成功する。

背中の方から聞こえる声から逃げるように、慌てて表通りへと走っていった。

表通りに来ると、さすがにそこまでは追いかけてこなかったようで、ホッと一安心して、道沿いの建物に背を預けて座り込む。

「疲れた……」

このたった数時間が、まるで数週間にも感じられた。

空を見上げると、次第に赤く染まり初めており、ジエンディアの宝石とも呼ばれるほどの美しい夜景を、もうすぐ見る事ができるようになる。

「そろそろだな……」

よろよろとした足取りで立ち上がる。

「おっと」

思わずよろけて、壁に手を突く。

頭を振って、気合いを入れ直して、歩を進める。

昼間もそうだが、夜になっても人の流れが少なくなる事はない。むしろ、人の数は多くなっていくかもしれない。

そんな中を、流れに逆らわないようにして歩いていく。周囲の店からは、美味しそうな匂いが誘ってくる。思わずほいほいと入ってしまいそうになる。

(だめだだめだ。今日は目的があるんだって)

その誘惑に負けまいと、バンは前だけを見て歩く。

しばらく歩くと、耳に馴染んだ音が聞こえた気がした。もちろん、店内の音が外まで聞こえてくるはずもないので、気のせいに違いない。

それに誘われたわけではなく、元々そこが目的地だったので、バンは目の前の酒場に入っていた。

中に入ると、妙な熱気が立ちこめている。まだまだ宵の口だというのに、すでに店の中は多くの客で賑わっている。

バンは店内を見渡して、待ち合わせの相手を探すのが、見た限りその姿はない。仕方ないので、カウンターに歩いていく。

「おお、バンじゃねえか」

「マスター、久しぶり」

「おお、そういや結構久しぶりだな」

マスターと呼ばれた、恰幅のいい男が笑顔で答える。

「カズノのヤツは来てねえか？」

「カズノ？ ああ、あいつの姿は、ここんところ、てんで見てないな」

「そうか……」

「なにかの密談か？」

「そんなんじゃない」

そう答えながら、カウンター前に座る。

「なにか飲むか？」

「そうだな……果実酒を適当に頼む」

マスターは、おいよ、と答えて、グラスに赤い果実酒を注ぐ。炭酸混じりらしく、グラスに注がれたそれはシュワシュワと音を立てている。

「サンキュ」

と、バンはそれを受け取って一口飲む。

「旨い。……この喉越しがたまらんな」

一気にグラスを空ける勢いで飲んでいく。

「ぷはあっ」

少しだけ残して、バンは大きく息を吐く。

そうしていると、少しずつ落ち着いてくる。そうすると、店内の音にも注意が向いてくる。

店内には、どこか民族的な音楽が流れている。

「こいつは……」

その独特の音がする弦の音は、バンも幾度となく聴いている。そして、その奏者を間違うはずもない。

その奏者の顔を思い浮かべながら、店内の奥の方に設けられたステージを見る。

そこには、予想通りの人物の姿があった。

その透き通るかのような顔は、店内の照明を受けてさらに輝いている。長い髪も、それをさらに彩っている。それに加えて、大きめな瞳に見つめられたら、男であれば誰でも魅了されるだろう。

さらにはこの見事な演奏だ。これには老若男女の区別なく、ましてや出身も関係なく、誰もを魅了してしまう。

ここの客は知らないかもしれないが、彼女は演奏はもとより、剣術にも優れている。天は彼女に二物以上を与えた……とは誰の言葉だったか。

バンは顔なじみの彼女の演奏に耳を傾ける。故郷にはなかった音のはずなのに、どこか懐かしいその旋律は、じんわりと体全体に染み込んでくる。

他の全ての客が同じように、彼女の演奏に集中しているので、マスターも静かに演奏を聴いていた。

しばらくして演奏が終わると、店内に拍手の音が響きわたる。その音は、まるで爆発のようだった。

奏者の彼女は、客に向かって礼をすると、愛用の二胡を持って、カウンターに向かって歩いてくる。

「お疲れ、シャオ」

バンはその彼女を笑顔で迎える。

「久しぶりですね」

シャオと呼ばれた彼女は、バンの隣の椅子に座る。それと同時に、彼女の前に飲み物が入ったグラスが置かれる。

「お疲れさん。相変わらずいい演奏だったよ」

マスターのねぎらいに、シャオ・ユイは笑顔で頷いて、グラスに入った飲み物を飲む。

「シャオもあいつに呼ばれた……ってわけじゃなさそうだな」

「カズノの事でしょうか？ でしたら、私が言って、この店にしてもらいましたよ」

「なるほどな……。ところで、あいつはなんの用でオレたちを呼んだんだ？」

「それは、私も聞いていませんね。厄介事でなければいいのですが……」

そう言って、シャオはグラスを傾ける。

「だよな。つうか、あいつはまだなのか」

約束の時間は既に過ぎている。カズノが時間通りに来る事はそれほどないとわかっているのだが、それでもその度に苛立ってしまう。

「諦めた方がいいですよ。彼が時間通りに来るなど、稀な事ですから」

「わかってるけどよ」

冷静に言うシャオは大人に見えて、騒いでいる自分は子どものようだとバンは思った。

「そういや、昼間に屋台街の方で、レビを見かけたんだが、なにか知ってるか？」

こういう場所で演奏をしている事もあり、シャオはなかなか街の事に詳しい。

「レビ・アレンスですか。そういえば、エリアス王室関係者のどなたかが、龍京のような活気ある市場をとか言って、その様子を誰かが視察するという話は聞いた事がありましたね」

「マジかよ……」

初耳の情報に、シャオの顔をまじまじと見つめてしまう。

「そうですか。その視察が……。しかし、エリアス全体で決まった事ではないようですし、案外立ち消えになる話かもしれません。おそらくは、無駄足になるでしょうね」

「なるほどな……。その程度なら、教えてくれてもいいんじゃないか」

「どんな内容であったとしても、決して答える事はないでそうね。任務に誠実な方ですから」

「誠実ってよりも、融通が利かないってんだよ、あれは」

「そうかもしれませんね」

シャオは口元に手を当てて笑う。

「その誰だか知らねえが、よりもよってあいつにそんな事を頼むたあ、気が知れねえんだがな」

「彼には彼で、イリスに同行していた過去がありますので、大陸を個人で移動していても、イリスの塔についての調査と思われるでしょうから、そういう意味で動きやすかったのだと思いますよ」

「なるほどね。しかし、騎士団長だろ？ そんな立場のヤツがね……」

「それを判断するのはエリアスですよ」

「そうだけどよ……。まあ、あいつの話なんてどうでもいいんだよ。つうか、あんなヤツを思い浮かべると、酒が不味くなる」

シャオは、それは言い過ぎでは……と笑いながら言う。

「ところで、あれからなにをしていたんですか？」

シャオが唐突に訊いたので、バンは少し面食らう。

「シャオがそういうのを訊いてくるなんて珍しくないか？」

「……そうかもしれませんね。旅の仲間として、少し気になった……。それではいけませんか？」

「いや、構わないぜ。そういっても、オレがなにしてたかって訊かれてもな……」

バンは思い出すように斜め上を見る。

「適当に、大陸のあちこちに行ってたさ。アオイチとエルバには少し長い間いたかもしれねえけど、だからって、別になにも企んじやいなかったぜ」

「別に、あなたが策略を練っていたとは思っていませんでしたが」

「……そっか」

自分が立ち寄る店では、だいたいバンがいると、なにかを企んでいると思われるので、そういう反応になれてしまっていた。それゆえに、シャオのような反応が新鮮で、少し照れてしまう。

「そういうシャオはなにしてたんだ？」

「私は相変わらずですよ。演奏をしながら……」

「まだ、シャオが求めるヤツには出会えてねえのか」

「そうですね。そういう運命ではないのでしょうかね」

シャオが少し気落ちしてしまったように見えて、バンは戸惑いを隠せない。

「まあ、すぐに見つかるんじゃないかねえか。シャオなら大丈夫だろ」

「……もとより、すぐに見つかるとは思っていませんでしたので、気長に探してみます」

「そうだって。シャオなら大丈夫だって」

「根拠のない励ましは相変わらずですね」

シャオはくすりと笑う。

「まあ、これがオレなんでね」

「ほう……成長していないようだな」

と、背後から会話に入ってくる声があった。

バンはその方向を見る事はしない。

「あなたも成長していないんじゃないかしら、カズノ・ナス」

シャオが、声の主を見て告げる。

「イイ男ってのは、タイミング良く現れないとな。時間に縛られてるのは、まだまだな証拠だろ」

「そうでしょうか。時間を守るのは、紳士のたしなみかと思えます」

笑みを浮かべながらのそれは、本気で窘めようとしているわけではないようで、まるで挨拶の一種のようだった。

「なるほど、そういう思考もあるのか。だが、自分が信じた道を進むのみだ」

そう言いながら、シャオの隣に腰掛ける。

「マスター、いつもの」

「はいよ」

そう言うと、すぐに琥珀色の飲み物が入ったグラスを前に置く。

「で、オレたちを呼んだ理由はなんだよ」

バンは少し不機嫌になりながら訊く。

「特に用件なんてないさ。久しぶりに会いたくなかった。それだけだ」

カズノは琥珀色の飲み物を飲みながら、それに答えた。

「ふざけんなっ。それだけのために、お前はオレたちを呼んだのか」

「そうだ」

淡々と答えるカズノに、飛びかかろうとするが、間にシャオがいるので、そうする事ができなかった。

「まあ、今日は楽しく語らおうじゃないか。どうだ、今までなにをしてたのか、語り合おうじゃないか」

「断る。つうか、それだけなら、オレは帰るぞ」

「そうか。それは残念だ」

そう言うが、感情は読みとれない。

「あら？ あなたが引き留めるなんて、珍しいじゃないですか」

「まあ、イイ男の親切ってヤツなんだがな……」

「意味深ですね」

「お前の親切ってのは気持ち悪い」

そう言い放ち、バンは席を立とうとする。

「そうか、残念だな」

カズノは、別段引き留めるわけでもなく、バンを見もせずに、ただグラスを傾げるだけ。

「じゃあな」

と、席を立って、店を出ようとする、

「もう帰るのか」

バンと入れ違いに、神秘的な雰囲気をもった女性が入ってきた。

「か、かかか、カティア？」

思いも寄らない人物の登場に、バンは戸惑わずにはいられない。

「残念だが、バンはもう帰るそうだ」

カズノがしれっと言う。

「そうか」

カティア・スーは、さほど関心がないようで、バンを見る事なく、カズノの隣に座ろうとする

。

「やっぱ、まだ残る」

店を出ようとしていたバンは、慌てて席に戻る。

「おいおい、帰るんじゃないのか」

「いいや、気が変わった」

冷ややかにからかう口調のカズノに、猛反発するように答えて、慌てて椅子に座ろうとして、滑ってしまって尻餅をついてしまう。

カズノはそれを見て失笑するが、カティアはそれすらも気にした様子はなく、マスターに注文

を言っていた。

「やはり、成長はないようですね」

シャオは微笑ましく、まるで弟でも見るかのように、優しい目でそれを見ていた。

なんとか座りなおしたバンだが、手にするグラスがカタカタと音を立てている。

さすがにここまで動揺するのは珍しく、それが無性におかしくてしょうがない。カズノは、笑いをこらえるのが必死だった。

「あまりからかうのはどうかと思いますよ」

シャオが窘めるように言うものの、カズノがそれを聞き入れるはずもないとわかっている。

「カティアがこんな所に来るなんて、珍しいな」

平静を装って話しかける。

「たまには、な。外界の情報も必要なのでな」

「そ、そうだよな。ずっとアトランティスにいるとな……」

なんとか会話を盛り上げようとするものの、さすがのバンでもカティア相手には分が悪かった

。

なにを話しかけても、端的に返されるだけで、発展の気配が全くしない。もっとも、返答があるだけでも恵まれているのだが。

カティアがいるせいで、緊張し続けているバンは、酒の味が全くわからない状態で、ただ時間だけが過ぎていく。

カズノは、そんなバンの様子を肴に、和やかに過ごしていた。

時折、シャオの演奏が店内に流れ、客たちはそれに酔いしれていた。

かくして、龍京の夜は、今日も平和だった。

F i n o .

とある龍京の日常非日常

<http://p.booklog.jp/book/26805>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26805>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26805>